

母児同室アンケート調査より

産科分娩部：寺村 珠緒

1. はじめに

近年、母児相互作用の形成の面などから、母と子が一緒に過ごす自然な形の母児同室制が見直されてきており、これを積極的にすすめていこうとする傾向も広まってきた。

しかし現在当科では、褥婦及び新生児の健康管理の面、看護体制の面などの理由から母児異室制をとっている。

そこで、母児同室制について検討してみるきっかけとして、当院で分娩した褥婦の意識調査を行ったのでここに報告する。

2. 研究目的

当院で分娩した褥婦の母児同室制に対する意識を知る。

3. 研究方法

期間：平成4年10月～5年4月

対象：当院において分娩した褥婦186名（初産婦87名，経産婦79名）

方法：産褥3日目無記名質問紙法を実施。

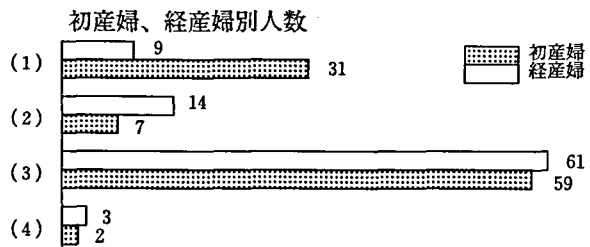
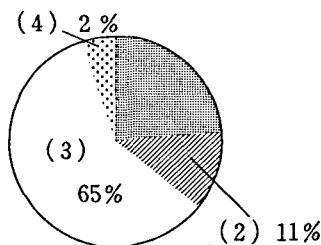
4. 研究結果

1) どれだけの時間を児と共に過ごしたいかについて (図1)

- ① 授乳時間のみ：40名（22%）初産婦9名，経産婦31名
- ② 朝から就寝時間まで：21名（11%）初産婦14名，経産婦7名
- ③ 授乳時間と面会時間：120名（65%）初産婦61名，経産婦59名
- ④ 1日中：5名（2%）初産婦3名，経産婦2名

(図1) <どれだけの時間を児と共に過ごしたいですか>

- (1) 授乳時間だけ 22% (40人)
- (2) 朝から就寝時間まで 11% (21人)
- (3) 授乳時間と面会時間 65% (120人)
- (4) 一日中 2% (5人)



2) 1) で②～④を選択した場合、いつからそれを始めたいかについて (図2)

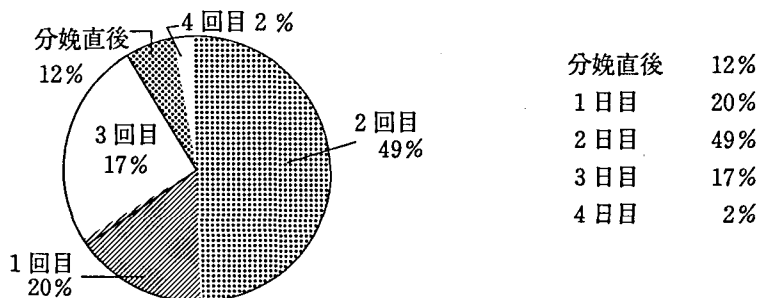
2日目～：72名 (49%)

1日目～：29名 (20%)

3日目～：25名 (17%)

産後直後～：17名 (12%)

(図2) (1) 以外を選択した人は、いつから母児同室を開始したいですか)



3) 今回母児異室制でよかったことはなにか (複数回答)

初産婦、経産婦にかかわらず自分の体を休めることができた (182名)、新生児室の方が安心して児を任せられることができる (125名) との回答が大半を占めた。

4) 母児同室制であればよかったと思うことはなにか (複数回答)

初産婦、経産婦にかかわらず、家族と児が直接会える (58名)、児の一日の様子がわかり育児の練習ができる (57名) であった。

しかしこれらの中でも、大学病院は人の出入りが多いので新生児室のほうが安全だと思う、という考えも少数ではあるがみられた。

5) 実際に母児同室制、異室制、両者の混合制を選択できればどうするか。またそれを行なう際にスタッフに希望することは何か

1) で①授乳時間のみ児といたいと選択した人は、全員が母児異室制を希望している。入院中は少しでも休んでいたいので、母児異室制である当院で出産したという人もいた。スタッフに希望することとしては、家族特に夫には早めに面会させてほしいである。

1) で朝から就寝時間まで、授乳時間と面会時間、一日中児といたいを選択した人のほとんどが、混合制を希望している。

スタッフに望むこととして、混合制を始める時期を個人個人の体調にあわせてほしい、きめ細かい指導をしてほしい、ベビー専門のスタッフがいて児の様子を詳しく観察してほしい、感染防止への配慮を十分にしてほしい、一緒にいない時の児の様子も知りたいので簡単なメモでもあればいいと思う、など様々な要望が出された。

その他、他施設での分娩の経験がある場合、そこで体制 (母児同室制、異室制) 及び、それはどうであったか。

母児同室制では、児の世話もできたが疲れた。

母児異室制では、ゆっくりと休むことができた。授乳時間が3時間おきであり疲れた。

両者の混合制では、授乳時間、授乳場所も自由に選ぶことができ快適であった。

5. 考 察

今回のアンケート調査では、授乳時間と面会時間を児と共に過ごしたいと望む回答が最も多かった。初産婦、経産婦の割合もほぼ同率である。理由はやはり、児と家族が直接会える、児と共に過ごす時間がもてることが挙げられると思う。

次に多かった回答は、圧倒的に経産婦に多いが、授乳時間のみ児といたいである。前回の分娩、育児の経験があること、退院後は家事、上の子供の世話などがあり、十分な休息をとることが難しいと予想されることからまず、自分の体の回復を第一に考えているのではないか。実際に、母児異室制であり十分に休むことができるので、当院で分娩したと回答した褥婦もいた。この回答は予想以上に多く、こちらが考えているよりも褥婦が産後の疲労回復を望んでいることがわかった。

反対に、初産婦では朝から就寝時間まで、又は一日中と少しでも長く児と共に過ごしたいと思っている傾向が多い。これははじめての経験であること、育児に慣れたいと考えているものと思われる。

1. で①授乳時間のみ以外を選択した場合、いつからそれを開始したいか、については、2日目からが49%とほぼ半数を占めている。分娩後は身体的苦痛、疲労がある。このアンケートは産褥3日目に実施していることから、産後2日目くらいからが疲労が回復してくる時期ではないだろうか。この時期は休息が十分にとれるよう援助していく必要性があろう。

実際に母児同室制、異室制、混合制を選択できるとしたら、混合制を希望する人が多い。

これは、前述したように児と家族が直接会え、なるべく多くの時間接することにより育児に慣れる、児と一緒にいたい、といった理由からである。早期の児と家族の面会は家族のきずなを深めるのに役立つ。特に父親の今後の育児参加に影響を及ぼすと言われている。尚、現在では長期入院中の児の場合、家族と直接面会してもらい、母親に何らかの理由があり早期に児と会えない場合は、母親のベットサイドに児を連れていくなどの配慮を行っている。

また入院中育児に少しでも慣れることにより、退院後の戸惑いが少ないのではないか。

この他に宗田によると、母乳分泌量が母児同室と異室では有意に差があるとも報告されている。

これらの意見の一方で、母児同室制を行うとしたら、私達スタッフ間にも戸惑う点が幾つか出てくると思われる。数多くの人が児と接するとそれだけ感染の可能性が高まるのではないか、児の観察が十分に行えないのではないか、その場合、異常の発見が遅れるのではないか現在の看護体制では母及び児への看護が十分に行えないのではないか、母親の疲労が十分とれないのではないか、などである。

しかし、母児異室制から同室制への改革を行う上で最も大変であったのは、宗田によるとスタッフ間での意見統一と、今までの体制の見直しであった、という報告もある。このため母児同室を実施するにあたっては、スタッフ間での十分な検討が必要になってこよう。

6. まとめ

今回のアンケート調査では、初産婦、経産婦に関わりなく家族と児との直接の面会を望む声が多くあった。今すぐ、すべての人に、とはいかないが、現在している配慮は引き続き行っていきたい。授乳時間のみ児に接している現在では、「赤ちゃんがずっと泣いている、どうしたらいいか」反対に「ず

っと眠っていて起きない、どこか悪いのではないか」などどうしたらいいかわからないといった内容の電話が夜間寄せられることも多い。

特に初産婦は、初めての経験で戸惑うこともあると思われるため、児と過ごす時間を多く持つ退院後の生活がより良く過ごせるのではないか。

一方で、経産婦の回答に多かったように、十分な休息を取れる環境を整えることも大切である。

褥婦のニーズは多様ではあるが、できる限りそれにそえるような柔軟な体制を創る必要性もあるだろう。

病院で過ごす時間は短いとはいえ、母と児の第一歩である。その中で大切な母児の早期接触に欠かせないのが、お互いが健康であることである。

私達は、今回のアンケート調査をもとによりよい看護ケアを提供していけるよう努力していきたいと思う。

*なお、母児同室制とは、一日中母と児が共にいること

母児異室制とは、授乳時間のみ母と児が接すること（現在の体制と同じ）

両者の混合制とは、一定の時間母と児が共にいて夜間は別々に過ごすこと

7. 引用, 参考文献

- 1) 宗田 哲男：なぜ母児同室制か，助産婦雑誌，43（12）：8 - 16，1989.
- 2) 神津トミ子他：母と子の絆のために，助産婦雑誌，43（12）：24 - 29，1989.
- 3) 赤井 通子他：半母子同室制，助産婦雑誌，43（12）：31 - 35，1989.
- 4) 国枝 トミ他：母児同室制の時期を考える，日本看護協会出版会，1989，52 - 54.
- 5) 黒沢 文子他：母児異室から同室へ移行しての一考察，日本看護協会出版会，1989，55 - 57
- 6) 井上 豊子他：P L病院における完全母児同室制までの取り組み，助産婦雑誌，48（9）：69 - 74，1994.